土佐湾ホェールウォッチング育成事業（要旨）

漁場環境科　中　島　敏　男

平成６～８年度に県単独事業の土佐湾ホェールウォッチング育成事業が水産庁遠洋水産研究所の指導を受けておこなわれた。調査結果は各年度ごとに担当者が「土佐湾ホェールウォッチング育成事業調査報告書」として報告した。平成９年度はこれら３年間の事業で得られた知見を総合考察する作業をおこなった。また、試料分析のおくれなどから各年度の報告書に記載できなかった調査結果なども考察した。

この考察結果は高知大学黒潮圏研究所所報「くろしおNo.13（1998年３月）」に『土佐湾のニタリクジラ』として報告したので要旨とする。

1　高知県のホェールウォッチング

1997年末現在、漁業者が漁船をホェールウォッチング船として利用し、運営するホェールウォッチング事業所は５市町６事業所がある。年間乗船者数は1995年に最大２万人に達し、その後も１万人台で推移している。ニタリクジラのホェールウォッチングが最も人気を集めている。

2　高知県沿岸で記載されたクジラ

ヒゲクジラ亜目３科６種、ハクジラ亜目３科13種が記載されている。

3　調査船による調査

1）ニタリクジラの群構造

３年間の調査中に発見されたニタリクジラの１群あたり平均頭数は1.5頭（75頭/50群）で、ほとんど群をつくらないといえる。季節別にみても、１群あたりの平均頭数に違いはみられない。子クジラを連れていると２頭以上の群が観察される。餌の存在が推測される海域で最大５頭の群を観察した。

2）ニタリクジラの季節別発見頻度と海域

季節ごとに土佐湾の西半分を調査した。調査距離１マイル当たりの１次発見群数・頭数は春季が0.025群、0.038頭で他の季節の２倍であった。発見海域も土佐清水市足摺岬から窪川町興津崎のごく沿岸から15マイル以内で、土佐湾でもより西側で多く発見された。

4　標本船日誌によるアンケート調査

1991日・隻の日誌を回収し分析した。

1）ニタリクジラの月別発見海域の推移

冬季から４月までは土佐湾西部のごく沿岸、距岸５マイル以内で発見されることが多い。季節が夏から秋へすすむにつれやや沖合や北側で発見されることもあるが、沿岸からの距離は20マイル以内である。

2）ニタリクジラの来遊盛期

土佐湾では周年みられるが、来遊盛期は５月と推測される。

3）土佐湾はニタリクジラの餌場と繁殖場

状況証拠として土佐湾で餌をとる行動、２頭が腹側を激しく接し合う交尾と考えられる行動、出産直後と考えられる背鰭の定まらない子クジラの発見等が報告されている。延べ発見群数879回のうち196回が親子連れであった。

4）漁船の航行がニタリクジラの行動に与える影響

漁船を接近させた場合（全速ではなく、半速から微速と考えられる）42%（25回/59回）の割合で近寄ってきた。船を通過させた場合23%（３回/13回）の割合で近寄ってきた。

5）発見距離別にみたニタリクジラの行動

船を接近させた場合クジラ発見時の船からクジラまでの距離が100m未満では75～80%の割合で近寄ってきた。100m以上では20～60%の割合で近寄ってきた。

6）親子連れのニタリクジラの行動

親子連れのクジラは66%の割合で船に近寄ってきた。親子連れでない場合は35%の割合で船に近寄っ

てきた。

7）摂餌中のニタリクジラの行動

餌を取っているクジラは63％の割合で船に近寄ってきた。餌を取っていない場合は30％の割合で船に近寄ってきた。

5　個体識別調査

背鰭の形、その変形及び傷を照合して1989～1996年の間に土佐湾で32頭が個体識別された。親子ともに「TB-01」、「TB-02」と個体識別された親子連れは1993～1994年の間、１年４ヶ月連れ添い、子クジラの体長が４ｍから７ｍに成長したことが確認された。この雌クジラ（と推測される）は1995年単独でいるところが確認されたが、1996年８月、再び識別されていない子クジラといるところが確認されている。

6　土佐湾のニタリクジラのルーツ

日本近海のニタリクジラでは黒潮を境に沖合の北西太平洋系群と陸側の東シナ海系群の存在が報告されている。土佐湾のニタリクジラは東シナ海系群に関係することが強く示唆される。